

# SHOW HEY シネマールーム

★★★

## コンフィデンシャル 共助

2017年 / 韓国映画  
配給：ツイン / 124分

2018 (平成30) 年2月12日鑑賞 大阪ステーションシティシネマ

Data

監督：キム・ソンアン

出演：ヒョンビン/ユ・ヘジン/キム・ジュヒョク/ユナ

### ■■■ショートコメント■■■

◆日本では、3連休となった2018年2月9日から11日の3日間は、平昌（ピョンチャン）冬季五輪の話題で持ちきり。レジェンド葛西紀明はノルディックスキー・ジャンプ男子のノーマルヒル本戦で21位と不本意な成績に終わったが、スピードスケートの高木美帆は3000mで2位、高梨沙羅はノルディックスキー・ジャンプ女子ノーマルヒルで3位と大健闘。しかし、羽生結弦や宮原知子が登場する男女のフィギュアスケートは・・・？

そんな日本選手たちの活躍とは別に、そこでは北朝鮮からやってきた「美女応援団」の華やかな話題の他、高齢ながら序列No.2の金永南（キム・ヨンナム）最高人民会議常任委員長や、金正恩（キム・ジョンウン）朝鮮労働党委員長の妹で彼の信頼の厚い金与正（キム・ヨジョン）中央委員会第1副部長の話題で持ちきりになった。しかし、兄の親書を持参したと言われている金与正から、北（平壤）への訪問を要請されたという韓国の文在寅大統領の心の中と「南北首脳会談」開催の目処は・・・？

そんなタイムリーな政治状況下、本作では韓国の庶民派熱血刑事カン・ジンテ（ユ・ヘジン）と北朝鮮の特殊部隊員リム・チョルリョン（ヒョンビン）のコンビが「共助」しながら、「ある任務」に立ち向かう姿がテーマに。その舞台は、南北高官会議が開催される韓国のソウルだ。

◆平昌五輪を契機として、韓国の平昌では、文在寅大統領と北朝鮮No.2金永南との「南北首脳会談」に近い「高官会議」が実現したが、そもそも本作の設定のように、ソウルで南北の「高官会議」が開催されるのは異例。本作では、冒頭にそれが実現する舞台裏（？）が描かれるから、まずはそれに注目！国連からの度重なる「制裁決議」にもかかわらず、北朝鮮が外貨を稼いできたのは、麻薬や通貨偽造等にも手を染めてきたからだ。そんな疑惑がずっと囁かれていたが、本作冒頭のシークエンスでは、精巧な技術で米ドルを大量に偽造している北朝鮮の実態が！なるほど、なるほど・・・。

こんな導入部を見ていると、本作はかなりシリアスな社会問題提起作！そう思っていると、意外にも偽造の要となる「銅版」を巡って、北朝鮮のチャ・ギソン（キム・ジュヒョク）隊長と特殊部隊員チョルリョンとの間に思わぬ抗争が発生！その結果、チョルリョンの愛する妻や部下たちはみんな殺され、ギソンは1人銅版を持って仲間たちと南へ脱北していくことに。何と金正恩委員長に忠誠を誓い、米ドルの偽造に邁進していたギソンが裏切り者だったとは・・・！

◆しかして、チョルリョンは北朝鮮の金正恩委員長から（？）、ソウルで開催される南北高官会議の随員の1人として派遣され、韓国の刑事であるジンテと共助しながら、ギソンからあの銅版を取り戻す極秘任務に就くことに。このように、冒頭からチョルリョンの立場と任務は明確だが、ジンテの方は上層部から単なる脱北者の逮捕が自分の任務だといわれているから気楽なもの。

さあ、無口で堅物、しかしイケメンで腕は超一流の特殊部隊員チョルリョンと、家族思いがおしゃべりで腕はイマイチ頼りない中年刑事ジンテとの凹凸コンビ、異色コンビの腹の探り合いと任務の遂行は・・・？

◆本作については、著名な映画評論家の山根貞男氏が2月9日付読売新聞夕刊で、かなり好意的な評論を書いている。私はそれを読んで「こりゃ、必見！」と思って、映画館へ行った。また、導入部分を見ただけでかなり興奮し、思わず観る姿勢を正したものだ。ところが、本格的にチョルリョンとジンテの「共助」作戦がスタートすると、アレレ・・・。

カン・ジンテ役を演じるユ・ヘジンは、多くの韓国映画で顔なじみの面白い個性的な俳優だが、その味はあくまで脇役としてのもの。しかし本作では、ほぼ全編を通じて彼（のおしゃべり）が中心となって物語が進んでいく。その点について、山根氏は、「ジンテの冗舌が随所で笑いを巻き起こす。彼の義妹が二枚目のチョルリョンに熱を上げ、家族騒動になるのもおかしい。ジンテのユーモアと、チョルリョンの緊張感が絶妙に組み合わせられる中、会談の3日間という制限時間が過ぎてゆく」と書いている。しかし、ジンテの妹シンラ（ユナ）がチョルリョンに熱を上げるシーンやジンテと妻との夫婦喧嘩のシーン、さらに、何度もジンテが繰り返す韓国での刑事の取り扱いの不当さ等々の言い分は、本来のストーリー展開とは無関係のどうでもいいもの。したがって、何度も何度もそんなシークエンスが登場すると、私はいよいよ加減うんざり・・・。

◆本来のストーリー構成の核であるはずの銅版が意外にチャチなものであることが、本作中盤以降少しずつ見えてくる。また同時に、ギソンがそれをどのように活用して、韓国国内で生きていこうとしているのか、という「実態」が容易に見えてこなくなる。そのため、本来シリアスなはずの「米ドル偽造」という大問題が、いつの間にかストーリーの本筋から消えてしまってくる。したがって、本作中盤以降本作は、銅版が入っている小さなアタッシュケースの取り合いという単純な展開に・・・。

奇しくも本作と同時に公開されているジョン・ウー監督の『マンハント』（17年）は、

逃亡する中国人弁護士ドゥ・チウと、それを追う大阪府警刑事矢村聡との「共助」の物語だが、「共助」という視点だけから見ても圧倒的に本作より『マンハント』の方が面白い。これでは南北朝鮮問題が全世界から注目を浴びている昨今、最新の論点をテーマとした本作は如何なもの・・・？また、山根氏の好意的な評論も如何なもの・・・？

2017（平成29）年2月15日記